

「贅澤に女中まで置いたアるのんか」

「へエお竹どんと云ふて、ア、奥さん妙だんな内の女中さんもお竹どんなら先方の女中さんもお竹どんだす、同じお竹どんでも甚い違ひや先方のお竹どんは別嬪で能う氣が附くが内のお竹どんは面白い顔やな」

「面白い顔でもだんないほつといて」

「怒りないナ、ほんまの事を云はんと血を吐いて死ぬがな」

「そんな事をほんまに云はいでもゑいがナ」

「コレ定吉貴郎袂の中で何やガチャ／＼云ふてるのんはそらなんやね」

「ア、これは獨樂でおます」

「なんや獨樂や、そんな物を持つてるのんでお使ひが暇いるのんやないが」

「イエ是はあたいのんやないのんで、且さんのんだす」

「且さんのん、且さん獨樂みたいな物を何うなさるね」

「これ三つ有りまんね。この獨樂を此間伏見のお稻荷さんで御祈禱をして貰ふて來ましたんだす」

「それ何うするね」

「コレ三つ廻して當つた方で且さんがお泊りになりますね。これ皆紋が附いてますやろう、丸に片ばみの紋は且さんのんで、花菱の紋は奥さんの紋だんな。蔦の紋はお妾はんの紋だす。是れを廻すのんは罪の無ひ者が廻したら宜いと云ふのであたいが廻す役になつてますね」

「どんな事をするね定吉廻してみ」

「奥さんの獨樂を此處へ廻します。お妾はんの獨樂を此處へ廻します。且さんの獨樂をこの真中へ廻します。これがコツンと當つたら當つた方へお泊りになります。ア、且さんの獨樂がお妾はんの方へ行くそれ／＼コツンとお妾はんの獨樂に當りました」

「マア嫌ひやの、モウ一遍廻してみ」

「何遍でも廻します。今度はお妾はんの獨樂を彼方の方へ廻して、奥さんの獨樂を此處へ廻して且さんの獨樂を奥さんの傍へ廻します。あたいらこないに奥さんの肩を持つてまんね。ア、今度は何うやら奥さんの獨樂に當りそうな、だいぶん近寄つて來た。ア、且さんの獨樂が逃げよる逃げよる。奥さんの獨樂が追馳けて行く且さんのんが早うなつて來たソラ／＼／＼コツンそれお妾はんの獨樂に當つた」

「マア且さんの獨樂なんでそないになるね」

「あたい知りまへんがな」

「一遍見てみとう」

「且さんの獨樂なんどこないになるねやろう。ア、奥さんあきまへんわ」

「なんでやね」

「へエ肝腎の心しんが狂ふてますね」